

# 野外運動研究室ニュースレター

編集：筑波大学野外運動研究室広報係  
発行：筑波大学野外運動研究室  
〒305-8574 つくば市天王台 1-1-1  
TEL/FAX 029-853-6339  
URL <http://yagai.tsukubauniv.jp>

ダボス牧場より～撮影者：小西諒

## 【巻頭言】

### 「育つ」力



吉松梓 (DC1、駿河台大学)

こんにちは、吉松梓です。キャンプネームは「かんち」(旧姓がオダなので)といいます。私は2001年に筑波大学に入学し、3年次より野外運動研究室に所属しました。その後、大学院修士課程で3年間、さらに体育センターで

準研究(現特任助教)として3年間、計10年間を筑波大学で過ごしました。2011年からは、駿河台大学に赴任し、一般教養体育の野外関連の種目を中心に担当しています。また、今年度(2016年度)から、筑波大学の博士後期課程に入学し、再度学生として坂本先生にお世話になっています。

さて、私はこれまで不登校や発達障害などスペシャルニーズのある子どものキャンプに携わってきました。その実践の場で学んだことを改めて振り返ってみると、野外教育の場・体験の力を信じて、子ども達が自ら「育つ」力を見守ることの大切さを学んだ、ということが一番大きかったように思います。心理臨床家の河合隼雄は「子どもと学校」(岩波新書)の中で、「われわれは『教える』ことを焦るよりも、根本的には『育つ』のを待つ方がはるかに効果的であることを知らされた(p.35)」と指摘しています。しかしながら、この「育ち」を待つということは容易ではありません。私が身を置いている大学教育においても、息子の入学式の服装を電話で問い合わせる親、学生が連続して授業を欠席したら電話をかけてくれる大学職員など、学生が自ら「育つ」ことをしなくてもいい環境、厳しい言い方をすれば学生の「育つ」機会を奪ってしまっているような状況にたびたび出くわします。そういった意味で野外教育には、「育ち」の土壌となる場・体験、「育ち」を見守る人、の要素が多く含まれていると改めてその重要性を感じます。

少し偉そうなことを書いてしまいましたが、現在私は1歳と4歳の娘の「子育て」真っ最中。つい

い口を出してしまったり、先回りし過ぎてしまったりと、「育ち」を見守るのでなく、こちらが「育てる」意識が強くなりすぎてしまうことも多々あります。そんな時私が思い出すのが、尊敬する恩師(女性の児童精神科医)の「子育ては頑張らなくていいのよ、受け身でいいのよ」という言葉です。この言葉を思い出すとフッと肩の力が抜けて、娘の失敗もわがままも楽しみながら見ていられる余裕が生まれます。

最後に、「育つ」のが一番難しいのは、大人になってしまった私自身であるというのが最近の実感です。先日、博士課程のセミナー発表を終えた後、坂本先生から「あの質問、修論生のときの吉松さんだったら答えられたよね・・・」と指摘されました。この言葉は、心にグサッと突き刺さり、研究者としての私の「育ち」は止まった(むしろ退行した?)状態であったことに直面させられました。研究者として、教育者として、親として、ひとりの人間として・・・自ら「育つ」ことを大切さと難しさを日々実感する今日この頃です。

## 【正課事業報告】

### ○種目別コーチング演習II

飯野亜耶奈(MC1)



室員の面々

[期日]2016年12月2日～3日

[場所]茅ヶ岳、金ヶ岳

[指導者]渡邊、飯野

[参加者]種目別コーチングII受講者8名

[オプション参加者]川原田、木持、前川、小川

体育専門学群2年生を対象とした、「種目別コーチング演習II」の授業の実習として、今年度は茅ヶ岳・金ヶ岳の山行を実施しました。この山行は授業の履修生である学生8名と、授業担当の渡邊先生、TAの飯野に加えて、オプションツアーとして参加した川原田、木持、前川、小川の総勢12名で行われました。いろいろな要因が重なって、本来ならばキャンプ場でのテント泊の予定が、初日の夜をコテージで迎えました。参加した学生たちは非常に個性豊かなメンツが揃い、終始賑やかな雰囲気でした。コースとしては短いものではありませんでしたが、初めての登山経験の学生も多く、笑顔を失う瞬間も見られました。今回の山行を通して感じたり、考えたことが一人ひとりの心に刻まれているといいですね。

### ○第19回日本野外教育学会 in 御殿場

佐藤冬果(MC2)

[期日]2016年10月14日～16日

[場所] 国立中央青少年交流の家

[参加者]井村、坂本、渡邊、坂谷、吉松、大友、佐藤、吉沢、飯野



学会参加の面々

日本野外教育学会第19回大会に本研究室から計9名が参加し、研究発表や自主企画シンポジウムの運営を行いました。

研究発表では、大友が「長期キャンプにおける課題を抱える児童生徒の社会適応に関する研究(大友、坂本、坂谷)」、佐藤が「社員研修としての野外教育プログラムに関する自伝的記憶(佐藤、渡邊、井村、尾崎)」というテーマで口頭発表を行いました。

また、自主企画シンポジウムでは、「野外教育における心理臨床的アプローチ-発達障害の子どもの社会化と個性化-」というテーマで坂本先生(企画者)、大友(話題提供者)、渡邊先生と吉松先生(指定討論者)、坂谷先生(司会)が運営を行い、また「情報交換会-いま若者にできること-」というテーマで、佐

藤(企画者)が他大学の大学院生3名とともに企画運営をしました。

私は学会参加も8年目で、やっと発表者として参加することができ、一安心…というのが正直な感想であります。自分は「自伝的記憶という視点からキャンプの研究をするよ!」と、今まで「研究どうなった?」と毎年心配してくださった先生方にお伝えできたことは、これからは繋がる経験でした。また、自主企画シンポジウムが学会全体で2つしか企画されなかった状況の中、坂本先生を始めとする先生方の裏番組としてシンポジウムを運営することに、身が引き締まる思いがしました。今年度はCONE(NPO法人自然体験活動推進協議会)の全国フォーラムと同時開催であり、学会での久しぶりの再会と、CONEの皆さんとの新しい出会いに恵まれた学会参加でした。

### ○Asia Oceania Camping Congress 2016

吉沢直(MC1)



発表中の佐藤さん

[期日]2016年10月28日～31日

[場所]国立オリンピック記念青少年総合センター

[参加者] 渡邊、佐藤、吉沢

本会には、アジア・オセアニア地域を中心に400名を超える実践家・研究者が集まっていました。今大会のテーマは「アウトリーチ：手を差し伸べるキャンプ」であり、世界各地で行われている special needs キャンプの取り組みを中心に、さまざまな講演やワークショップが行われました。交流会も多く準備されており、外国の方々とコミュニケーションをとることがとても多かったです。コミュニケーションをとる楽しさ、伝える難しさの両方を感じる機会となりました。

また今大会では佐藤(MC2)が「Autobiographical Memories of an Outdoor Education Program for Associates Training : Exploring Narrative and Memory Characteristics」、吉沢(MC1)が「The Thinking Process in Solo Experience」というテーマ

で研究発表を行いました。発表時間25分を英語のみで乗り切るといふ我々にはかなり厳しい状況でしたが、無事に発表を終えることができました。フロアからも多くの質問やご意見を頂き、いい経験をすることができました。

### ○実技理論実習「野外運動」

小川裕太郎(UG3)

[期日]2016年11月16日～17日

[場所]野性の森

[指導者]渡邊、飯野、吉沢、川原田、木持、前川、小川、加藤

[参加者]体育専門学群2年生 男子60名・女子3名  
実技・理論実習I「野外運動」受講者の体育専門学群2年生の男子学生60名と、春のデイキャンプに日程の都合で参加が出来なかった体育専門学群3年生の女子学生3名が、デイキャンプを行いました。

天候に恵まれた中でのプログラムでしたが、季節柄寒さの厳しいものでした。前日の雨の影響からか、薪として使用する乾燥した枝の確保に苦戦するものの、それぞれが工夫を凝らすなど考えながら活動をしていました。デイキャンプ恒例の夕食コンテストでは、指導者陣を満足させる品々が出品され、大変混戦を極めました。私自身としましては、このような指導者の立場に立つたびに気づかされること、新しい発見ばかりで貴重な時間を過ごすことが出来た2日間でした。

### ○野外運動方法論演習IV(研究発表)

川辺光貴(UG3)

[期日]2016年12月14日、21日

[場所]5C402

[参加者]井村、渡邊、吉沢、飯野、跡部、有馬、小川、加藤、川辺、草薙、小西、高田、船倉、堀

カレー大好きペーコンこと、UG3の川辺です。

僕らが研究室に配属してから、早くも7か月が過ぎようとしています。4年生、修論生は提出の時期を迎え、毎日夜遅くまで頑張っています。そんな僕らも1年後には卒論提出があり、そのための研究法を学んできました。授業最後の2回では、UG3の5人ずつで研究テーマの発表会を行いました。みんなの前で発表をすることで、自分では気づけなかったことや、より良くするためのアドバイスをもらい、より一層と研究に対して具体化や明確化が図れたのではないかなと思います。

年明けには4年生も含め20人という大所帯で長野県の菅平にてスキー実習が待っています。私事では

ありますが、11月にヘルニアの手術を行い、一人だけ別プログラムにならないかがとても心配です。みんなと一緒に楽しめるように年末年始もリハビリ生活を送ります！

### 【課外事業報告】

#### ○とわの森三愛高校野外研修

新井洸真(MC2)

[期日]2016年10月20日

[場所]筑波大学野外運動実習場 野性の森

[指導者]坂本、坂谷、佐藤、大友、新井

[参加者]とわの森三愛高校トッパスリート健康コース生徒41名

修学旅行の一環として、とわの森三愛高校2年生の皆さんが野性の森でA.S.Eに取り組みました。前日はディズニーランドを満喫した生徒の皆さんでしたが、この日はうって変わって野性の森で過ごしました。先輩から噂を聞いていたり、事前にビデオを見たりしていたようで、初めから気合十分の様子でした。

トッパスリートコースの学生ということで、運動神経が良いことはもちろんですが、「諦めない」「何としてもクリアする」という精神的な強さも伝わってきました。しかし、難しい課題は、運動神経や精神的強さだけでは解決できないことにも気づき、「チームメイトのことを深く理解することが大切だと気付いた」「お互いの強さを最大限に引き出さないと課題は解決できなかった」といった振り返りでの発言もありました。楽しくも学びの深い時間が過ごせたようで、「ディズニーより濃かった」という感想を聞いたことはとても喜ばしかったです。

#### ○JOC ナショナルコーチアカデミー「野外研修」

吉沢直(MC1)

[期日]2016年9月13日

[場所]筑波大学野外運動実習場 野性の森

[指導者]坂本、坂谷、大友、佐藤、吉沢、飯野

[参加者]JOC ナショナルコーチアカデミー36名  
スタッフ5名

JOC ナショナルコーチアカデミーは、各競技団体により推薦された指導者が国際的競技水準を踏まえた強化ができるコーチになることを目的とし開催されています。そのアカデミーの活動の一つとして、坂本先生の統括のもとASEが行われました。今回の参加者の中にも、五輪のメダリストや代表チームの指導者の方々がいました。

当日は天候が不安定だったため、アイスブレイクを中央体育館で行った後で野性の森のエレメントに

移動する変則的な日程になりました。実際の ASE の中では、みなさん主体的に活動しており本気で悔しがる姿が印象的に残っています。参加者の皆さんは、指導者である我々までも巻き込む力があり、さすがは各スポーツを代表する指導者だと感じました。

また、普段野外運動研究室はオリンピックとは遠い存在ですが、こういった我々の活動がトップの競技スポーツにも繋がることもあることを実感しました。小さな関わりかもしれませんが、オリンピックに関われることは体育学生として誇らしく感じました。

### 【個人実践報告】

#### ○谷川岳登山

飯野亜耶奈(MC1)

[期日]2016年11月5日～6日

[場所]谷川岳

[参加者]吉沢、飯野、その他1名

筑波大学が雙峰祭で盛り上がる最中、私たち体育の人間に学園祭などというものはスケジュールにありません。「この連休に山に行かないわけではない」と意気込んだ谷川岳登山。聞いている限りでは、山頂は結構な積雪で山はすっかり冬のようだ。どんな山かは知らないけど、とりあえず二人がいるから大丈夫だろう、といつものように安易な気持ちで迎えてしまった谷川岳登山。

天気は快晴、山からの景色は最高。テンション上がってハードな岩場も驚きながらも楽しく乗り越えていきました。しかし、山頂に近づくにつれて増える雪。そして標高差の大きいハードコース。心折れ弱音を吐きまくった私を励まし続けてくれた二人に、今も感謝しています。雪に苦戦し、予定時間をはるかに越えてテントサイトに到着。結局、2日目は強風と雨により稜線歩きを断念し、エスケープルートに変更しました。岩、紅葉、そして雪。秋と冬が入り混じったような美しい景色に、来てよかったと思えた山行でした。



谷川岳山頂にて

本来のルートを決断せざるを得なかったこの心残り。またこの谷川岳に挑戦したいと思わせる余韻を生み出し、そうしてまた私たちは山に登るのでした、、、

### ○International Camp Director Course(ICDC:国際キャンプディレクターコース)

佐藤冬果(MC2)

[期日]2016年10月24日～28日

[場所]国立オリンピック記念青少年総合センター

[参加者]佐藤、藤田

国際キャンプ連盟による資格「国際キャンプディレクター」を取得するための講習会である ICDC に、本研究室から佐藤と藤田が参加しました。日本や中国、シンガポール、アメリカ、ロシアなど各国から集まったキャンプのプロ達約 30 名と共に、講義やディスカッション、グループワークを行いました。講義のテーマは、キャンプのミッション、プログラムデザイン、リーダーシップトレーニングやマーケティングなどで、全て英語で行われる講義に 2 人とも悪戦苦闘しつつも、無事に修了することができました。

コースの最終日には、グループ毎にモデルキャンプを企画し、全体に向けて発表しました。そこに至るまでの細かいシュミレーションやチームメイトとのディスカッションを通じて、今まで「経験知」や「例年に習って」など、自分のやり方に曖昧な部分があったことを痛感しました（それもそれでいい部分もあるのかもしれないが）。また、ディスカッションを聞きながら文化の違いを感じつつも、「キャンプ」という共通のキーワードで繋がる不思議な縁を感じることができました。「ICDC メンバー」というコミュニティの親密さと親切さがとても居心地よく、各国にキャンプ仲間がいることの心強さを得ることが出来ました。

次回会場はソチ。皆に再会したい気持ちが私の気持ちをソチへと向かわせているのを感じつつ、次に会う時に胸を張ってキャンプトークができるよう、英語力とキャンプ力を高めておきたいと思う今日この頃です。



ICDC 参加の面々

【番外編】

○祝！卒業生たちの結婚が続く

佐藤冬果(MC2)

平成24年度卒業生、鶴木優輝氏の結婚式が2016年12月17日、地元鹿児島で行われ、野外運動研究室から坂本先生、佐藤でお祝いに行って来ました。消防士として活躍する鶴木氏。美人の奥様と並ぶと、頼もしさが一層増したように見えました。末永くお幸せに！

そして、共に参列した、山川晃氏（26年度修了、

機構本部で活躍中）、日比野功宜氏（24年度修了、日高少年自然の家で活躍中）の機構コンビ。日比野氏はこの前の週に結婚式でした。おめでとうございます！末永くお幸せに！



リレーコラム OB・OGからのメッセージ

平成13年度修了



土方圭さん

（亜細亜大学法学部講師）

北風が吹き荒ぶこの季節は、卒業、修了に向けた論文作成・発表の時期でもある。学生の皆さんは納得のいく取り組みができたであろうか。研究者を目指さなくとも、徹底的に研究に浸るという経験をした者には多くの気づきが齎されたのではないだろうか。

私は2016年に「風土」という概念を鍵とする論文を2本発表した。この鍵概念「風土」については和辻哲郎著「風土－人間学的考察－」が広く知られる。この文献を初めて読んだ時には、その意味するところがよく分からなかった。何か重要なことが書かれているような感じがした。が、やはり分からず、鳩尾が強張ったままであった。同時に、著者が一体何を考えているのかを理解したいという想いが沸々と湧いてきた。

私は文学少年ではなかった。しかし、大学院以降は多くの書籍に触れることになり、様々な著者の思索を契機にして、思考の深みに繰り返し「沈潜」することになった。何を言いたいのかわからなかった和辻哲郎の「風土」も、執拗に読み返すことにより、少しずつ腑に落ちるようになった。そこには世界の在り方（世界観）、人間の在り方（人間観）を転回する試みが記されていることを理解し、驚嘆した。私は和辻哲郎との対話を通して、今までにない世界の観え方に気付かされたのだと思う。そしてまた、長年悩み続けてきた「野外」とは何か、「自然」とは何かという問いに対する「視座の転回」「観点の変更」という研究上の示唆をも得ることができた。

学生の皆さんには、多くの著者（研究者）との対話を通して（つまり読書）、様々な価値観にふれる経験をして欲しいと思う。そして、それに伴う思考の深みへの「沈潜」により、ひょっとしたら、今までとは違う世界を手に入れるかもしれない。

情報が溢れ簡単に入手できるように思われる現代である。しかし、自分にとって本当に重要な情報はそう多くはなく、また、即時的に手に入るものではないように思う。「脚を止め」、思考に「沈み、潜り」、他者（著者）と、そして自分と「対話する」ことが肝要となろう。野外運動研究室における身体運動を介した新たな世界の探求・発見と併せて、こちらも是非、意識して欲しいと思う。

【編集後記】初めての体験で戸惑うことも多く大変でしたが、周りの助けもあり、無事に終わることができました。ありがとうございました。（小西）